

共犯宣言

としての序文

ちんすこうりな『女の子のためのセックス』批評特集について

平居謙

ちんすこうりなは、この詩集に運命を掛けている。
彼女はこの詩を出すとき「全て失う覚悟」で出すと言った。
どの程度のデフォルメが入っているのか僕は知らない。
というより彼女の私生活についてはよく知らないのだ。
だが、例えば恋人がいるとしたら、その彼にとって
彼女の自由奔放さの背景に詩が存在することが気に食わないのはよく分かる。
もっともそんな世間じみたレベルの話ではないのかもしれない。
彼女の覚悟はもっと別の次元にあるのかもしれない。
ともかく「センセーも共犯ですからね」と
彼女は僕にそう言った。
たしかに著者と編集は共犯であると言えなくもない。

彼女が第1詩集を出した時、本名で出すと言いつつ放ったのだが
僕は止めた。かなり必死になって止めたような覚えがある。
彼女の詩を見れば、誰だってそう思うだろう。
それに、ペンネームであるからこそ飛躍的に自由な表現が得られるというメリットもあるに違いない。
それで僕は彼女に「ちんすこうりな」という筆名を贈ったのだ。

彼女は北海道生まれだから沖縄のちんすこうとは縁が薄い。
けれどもちんすこうという名前は彼女のために最初から存在していたかのように感じらえたから
自然その名前は彼女の身体と同一化していった。

だが僕は今度は止めなかった。
同一化した名前を彼女から引きはがせば、
身体以上に大切な何か純粋な姫事が消えてなくなるような気持ちがしていた。
だから共犯の呼び名を堂々と受けようと思ったのだ。

この特集に書いたそれぞれの、
有名無名を問わず、この詩集との遭遇の瞬間を愛したもののばかりだ。

この特集に書かれた批評は、売上を伸ばすための広告ではない。

この批評を得ることが、ちんすこうりなが詩集を出したことの大きな意味—最終目標とは言わない—であると著者にとってそう感じられれば僕は嬉しいと思うし、実際そのような質のものを提示し得たと考えている。

また読者諸氏にとっても、

他の詩の読み手が

どのようにこの詩集と相對したかを知る大いなる指標となるに違いない。

末尾ではあるが、ご寄稿諸氏に感謝申し上げる次第だ。